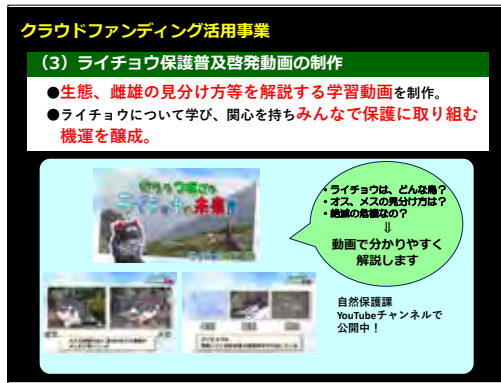




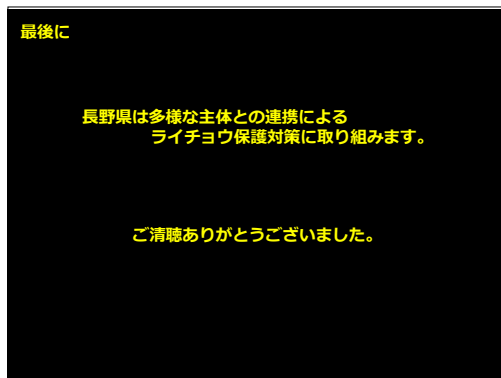
非常に分かりやすく解説している動画になりますので、ぜひ御覧いただければというふうに思います。こちらは長野県自然保護課のユーチューブチャンネルのほうで公開しているところであります。

これら3つ御紹介しましたのがクラウドファンディング活用事業というところでありますけれども……。



こちらはライコちゃんといましてライチョウをモチーフにしたキャラクターになるのですけれども—このグッズの売上げの一部を御寄附いただいています。

こういったように企業様との連携しながらライチョウ保護を進めているところであります。



3つ目のクラウドファンディングの活用事業としましては、ライチョウ保護普及啓発動画の制作ということでもあります。

こちらは、スクラムプロジェクトということで幅広い皆さんと連携、協力してライチョウ保護を推進していくに当たって、まずライチョウについて知っていただきたいということで、その生態であったり、先ほどの雌雄の見分け方であったりを解説する学習動画を製作しています。こういったことでライチョウに関する基礎知識がない方でもライチョウについて学んで興味を持っていただいて、みんなで保護に取り組む機運を醸成していきたいということで制作しております。

こちらの動画ですけれども、実際のライチョウの動く映像ですとか、あとは今回いらっしゃいます専門家の中村浩志先生にも解説などをいただいて、

幅広い主体との連携ということで企業とも連携してライチョウの保護対策を進めているので、ちょっと御紹介させていただきます。

長野県のほうには生物多様性保全パートナーシップ協定という制度がありまして、こちらは保全活動に企業ですとかいろんな方の参画を促して社会全体で生き物の保全を推進していこうというような協定制度になっております。

こちらの事例を見ますと、例えばサッポロビールさんと協定を結んでおりまして、サッポロビールさんのほうで年に1回ほどこういった信州環境保全応援缶という限定ラベルのサッポロビール黒ラベルを販売しておりまして、その売上げの一部を御寄附いただいています。

こちらのコシダテック様、KMC北関東様という企業ですけれども、バイク用品の販売をしている企業になります。その店舗でのPRキャラクター—

長野県では、クラウドファンディングですとか企業様との連携ですとか、多様な主体との連携によって保護対策を進めております。引き続きどうぞよろしく願いいたします。

御清聴ありがとうございました。(拍手)

○座長(有山 義昭) 峰村様、ありがとうございました。

長野県の取り組みといたしましてクラウドファンディングの3つの事業、あとは企業との連携等々もお話しいただきまして、ありがとうございます。

7 「中央アルプスにおける山岳信仰について」

小池 勝典(宮田村教育委員会文化財担当係長)

○座長(有山 義昭) それでは、最後の発表になります。

最後は「中央アルプスにおける山岳信仰について」ということで宮田村教育委員会の小池様からお話しいただきます。

文化的な部分での発表というのは唯一ですので、聴講をお願いいたします。

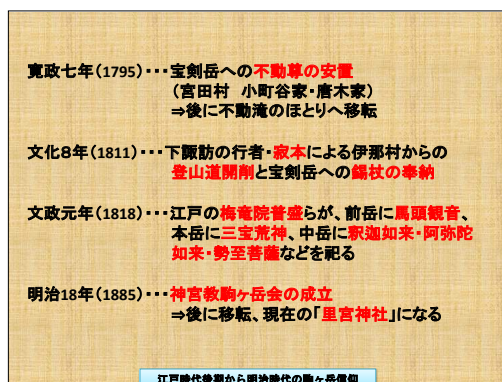
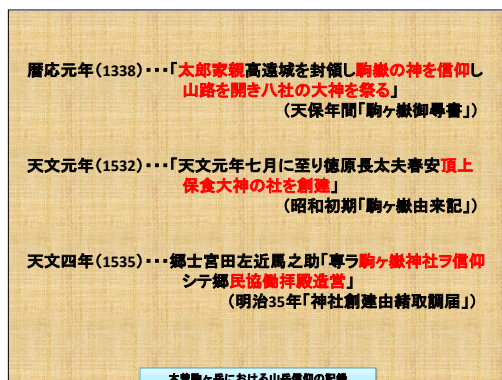
なかなか歴史的資料をいろいろひもいって当時の生息地の背景とかライチョウがいたという情報というのも重要な要素かと思しますので、そういった視点も含めてお話しいただくような流れになります。どうぞよろしくをお願いいたします。



○小池 勝典 皆様、こんにちは。

私は今御紹介をいただきました宮田村の教育委員会で文化財を担当しております小池と申します。

本日ですけれども、中央アルプスにおける山岳信仰の様相と、それから中央アルプスにおけるライチョウの歴史的資料につきまして、短時間ではございますが御説明をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。



中央アルプス駒ヶ岳の山岳信仰につきましては、どの時代まで遡れるかというのを証明するのはなかなか難しいことなのですが、実際には古くても江戸時代の中期以降の書物ですとか記録を頼るしかないのが現状でございます。

その江戸時代ですけれども、天保年間に地元の高遠藩の求めによって宮田村から提出したと伝わります「駒ヶ嶽御尋書」という古文書がございますけれども、こちらには暦応元年—西暦1338年に高遠家の始祖とされます高遠太郎家親が山路を開き八社の大神を祭ると記されてございます。これが正しければなんですけれども、室町時代の初め頃には駒ヶ岳の頂上に神様が祭られて信仰されていたということになります。

そのほかにも、戦国時代の天文年間に、木曾側、それから伊那側、それぞれより駒ヶ岳の頂上に神社が創建されたというようなことも言われております。

駒ヶ岳での山岳信仰が最も盛んとなったのは江戸時代の後期から明治時代にかけてです。この間ですけれども、宝剣岳に不動尊が安置されたり、それから文化8年には下諏訪の行者・寂本が宝剣岳に錫杖を奉納したりしております。この錫杖は宮田村のほうに御寄託いただいて、今でも現存しております。こういったことですか、あとは文政元年に本岳ですとか中岳あるいは前岳などに様々な仏様が寄進されたりなどもしております。

こういった山岳信仰ですけれども、山の上だけではなくて、麓の里部においても盛んに行われておりました。

麓の宮田村ですけれども、明治18年に神宮教駒ヶ岳会というものが成立しております、これは、後に出てきますけれども、現在宮田村にございます里宮神社になって現在に至っております。

これは最初に御覧いただきました駒ヶ岳の本岳の頂上に祭られております伊那側の駒ヶ岳神社になります。

駒ヶ岳の頂上には、これとは別に木曾側の駒ヶ岳神社も祭られております。

明治時代以降ですけれども、こちらの社殿は数度にわたり改築を経ておりますけれども、現在の社殿は昭和62年—1987年に改築されたものでございます。

こちらはロープウエーの千畳敷駅を降りてすぐのところにあります千畳敷の一角に祭られた信州駒ヶ岳神社であります。

こちらはロープウエーの無事故、安全、それからこの地を訪れる多くの登山者の安全、それから繁栄を祈願して昭和43年—1968年に新たに建立されて、平成21年に改築をされております。

この神社は、御存じの方は多いかと思いますが、よく見ますと、真ん中にある神額の左右にハイマツ、その両脇にライチョウの彫り物、彫刻が施されております。この社殿が構築された頃、1960年代に中央アルプスではライチョウが絶滅したと言われておりますけれども、かつてここに生息した神聖な鳥であるライチョウを意識してこういった彫刻が施されたものと考えられます。



麓の集落に見る駒ヶ岳信仰の標榜（里宮神社）

こちらですけれども、麓の宮田村に所在します里宮神社です。この石碑にもありますけれども、正式名称は駒ヶ岳里宮神社といいます。先ほど申しましたけれども、明治18年—1885年の神宮教駒ヶ岳会が前身となっている神社でございます。

駒ヶ岳山頂の駒ヶ岳神社を奥宮としまして、それに対する里宮ということで、こちらの駒ヶ岳里宮神社という神社も宮田村にございます。



麓の集落に見る駒ヶ岳信仰の標榜（蛭玉神社）

こちらは同じく宮田村に所在します伊那峡の蛭玉様こと、蛭玉神社でございます。ここにありますが、正式名称は駒ヶ岳蛭玉神社ということになります。

駒ヶ岳の中岳に、蛭玉様の祭神である天照大神とうけもちのかみ保食神が祭られておりまして、その中岳が蛭玉神社の奥宮となっているため駒ヶ岳蛭玉神社と呼ばれております。



麓の集落に見る駒ヶ岳信仰の標榜（石造物）

こちらは宮田村内でございますけれども、各所に見られる山岳信仰に係る石造物の例です。

日本の山岳宗教である修験道の開祖として知られるえんのぎょうじゃ役行者—えんのおづめ役小角ですけれども、こちらです。こういった役行者の石造物が宮田村内には5体確認されておりますが、こういったものですか、それから「駒ヶ岳大権現」とか「御ヶ岳大権現」と書いてある石碑なんかもあります。それから、駒ヶ岳講の行者さんを供養した、あるいはそういった行者さんを祭っている霊神碑と呼ばれるもの、こういったものを村内各所で見て取ることができます。

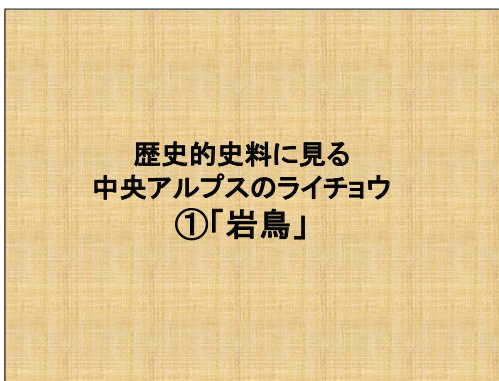
こういったように、駒ヶ岳における山岳信仰は、駒ヶ岳山頂部はもちろんなのですが、麓の里部にも古くから根づいていたことがうかがえます。

なお、今のところ中央アルプスの山岳信仰と、ライチョウとを直接結びつけるような歴史的資料ですとか文献資料というのは残念ながら見つかっていないのですが、ただ、中央アルプスにおけるライチョウの様子を記した歴史的資料というのは幾つか知られてございます。

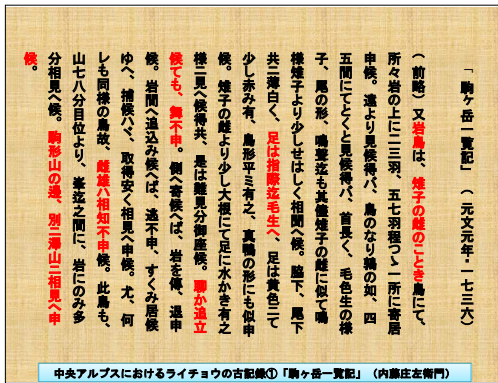
本日はライチョウ会議ということで、せっかくの機会ですので、この後はそういったものを御紹介したいと思います。

なお、これから御紹介する資料ですが、昭和15年に上伊那教育会から発行されております『駒ヶ岳研究』第1輯という本がございまして、そちらに記載されておりますので、そちらから引用しております。よろしく願いいたします。

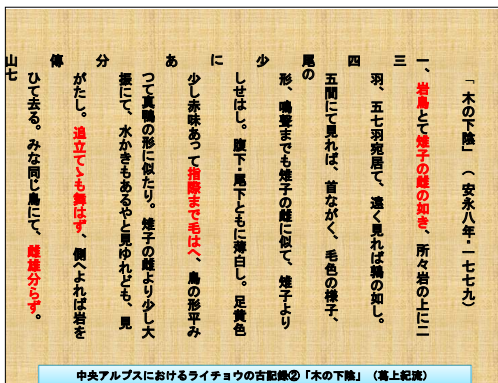
まず初めに「岩鳥」という記載のある資料になります。



歴史的史料に見る 中央アルプスのライチョウ ①「岩鳥」

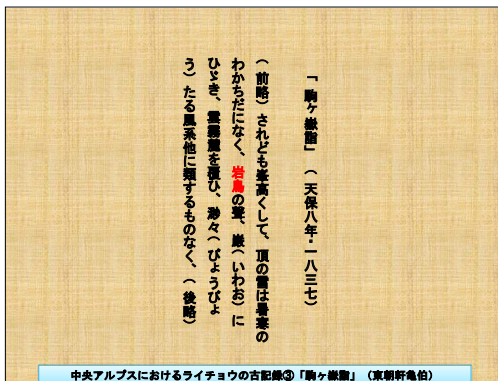


中央アルプスにおけるライチョウの古記録①「駒ヶ岳一覽記」(内藤庄左衛門)

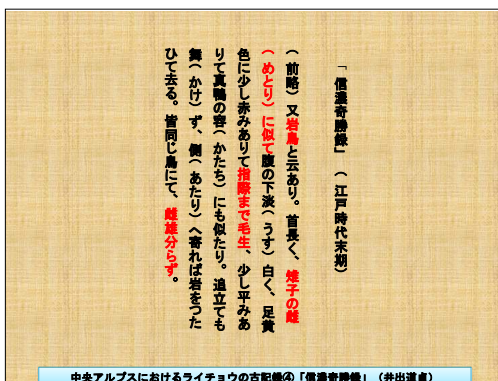


中央アルプスにおけるライチョウの古記録②「木の下陰」(高上紀流)

あとは、最後のほうには「諏訪立科ヶ嶽にも此の鳥あり」とありまして、これは現在のハケ岳連峰の北端になる蓼科山になるかと思いますが、このライチョウを捕まえて、最初は松の実で餌づけをして、それから後はすり餌で餌づけをして半年ばかり飼っていたと、その後「暑氣に至って斃れる」すなわち、暑くなった頃に死んでしまったというような記載があることから、諏訪の高島藩ではこうやってライチョウを飼育していたというような、そういったこともこういった資料から分かります。



中央アルプスにおけるライチョウの古記録③「駒ヶ嶽圖」(東朝軒亀伯)



中央アルプスにおけるライチョウの古記録④「信濃奇勝録」(井出道貞)

こちらですけれども、江戸時代の元文元年—西暦1736年、高遠藩の年寄、内藤庄左衛門らによって記された検分登山の見聞記「駒ヶ岳一覽記」というものの一節でございます。

これは全部ライチョウのことが説明された部分でございます。

ここには「岩鳥」とか「雉子の雌のごとき」キジの雌のようであるとか、「足は指際まで毛生え」と書いていますので指先まで毛が生えているとか、「聊か追い立て候ても舞い申さず」追っても逃げていかないとか、そういった中央アルプスのライチョウの様子が細かく記されております。

最後のほうには、「駒形山のあたり別に沢山に相見え申し候」とありますので、駒形山というと駒の雪形の出る中岳ということになるかと思いますが、そのあたりに特にたくさん見えたというふうに書いてあります。そういったことも分かります。

こちらですけれども、高遠藩の家老、葛上源紀流(五兵衛)という人が1779年—安永8年に記した地誌「こ木のしたかげ下陰」という有名なものがございまして、そちらの一節です。こちらの部分につきましても全部ライチョウのことが書かれておりますが、先ほど御覧いただいた「駒ヶ岳一覽記」の内容とほぼ一致しておりますので、恐らく先ほどの「駒ヶ岳一覽記」を参考に書かれたものと見られます。

若干異なるのは、最後のここに「ハイマツの下にマツカサおびたしく食い散らした様子に見えたり」とありますので、中央アルプスのライチョウは当時ハイマツの種を食べていたということなのではないでしょうか。ちょっと私は専門的なことは分かりませんが、松ぼっくりの食い散らかしたようなものがいっぱい見えたというようなことも書かれております。

こちらですけれども、俳句をやる俳人の東朝軒亀伯という人が書いた江戸時代の天保8年—1837年に記した雨ごい登山の記録であります「駒ヶ嶽もうで」の一節です。

ここには「岩鳥の声、巖にひびき」とありますので、中央アルプスのライチョウの声が岩々に響き渡っていたという様子などもうかがうことができます。

こちらは江戸時代の地方史家、佐久出身の井出道貞という人が書いた「信濃奇勝録」という有名な資料がございまして、そちらの一節です。こちらにつきましても最初に御覧いただいた「駒ヶ岳一覽記」、あるいは「木の下陰」の記載とほぼ一緒ですので、そういったものを参考にしていると見られます。



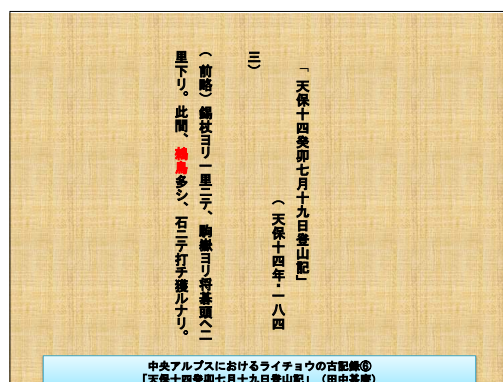
歴史的史料に見る 中央アルプスのライチョウ ②「鵜鳥」・「鵜」

続きまして、「ライチョウ」の「ライ」にこういう難しい字を書いて「鵜鳥」、あるいは「鵜」と書かれた資料を見てみたいと思います。



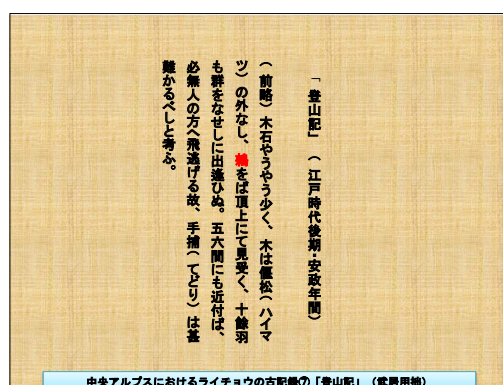
こちらは、江戸時代の後期、天保11年頃—1840年頃に記された「駒嶽紀游」という資料になりますけれども、これを見ますと、ところどころにカモシカですとかライチョウがいて、「鵜鳥はただ松をはんでいる」とか、「遠くへ飛ぶことはできず、人を見ても驚かない」、「打ちてこれを捕らえるべし」たたいて捕まえることもできるというようなことが書いてあります。

最後は「銃を放ちてこれを獲る」と書いてありますので、どうやらこのときはライチョウが銃で撃たれてしまったというようなことが書かれていて、そういったことも分かります。



これは田中甚庵という人が記した「天保十四癸卯七月十九日登山記」という資料になります。

ここには「錫杖より一里にて駒嶽より将基」—ここには「将基」と書いてありますけれども、今で言うところを将基頭だと思われます。「将基頭二里下り、この間、鵜鳥多し、石にて打ち獲るなり」とありまして、いわゆる駒ヶ岳の本岳から将基頭に至る間にライチョウがいっぱいいたと、先ほどは鉄砲で撃たれていましたけれども、このときも「石にて打ち獲るなり」ということで、ここでもライチョウは捕らえられてしまっております。こういった資料もございます。

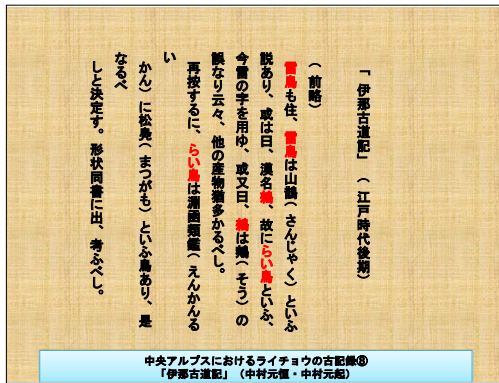


こちらは江戸時代の儒学者、武居用拙という人が江戸時代後期の安政年間の頃に記したとされる「登山記」の一節です。

ここには「鵜をば頂上にて見受く」駒ヶ岳の頂上でライチョウに出会って、それは「十余羽も群れをなせし鵜に出逢ひぬ」とありますので、駒ヶ岳の頂上で十羽余りの群れをなしていたということが分かります。

また、「近付けば必ず無人のほうへ飛び逃げるゆえ、手捕りは甚だ難しかるべしと考ふ」とありますので、捕まえようと思っても逃げてしまうから手捕りは難しいだろうといったようなことも記されております。

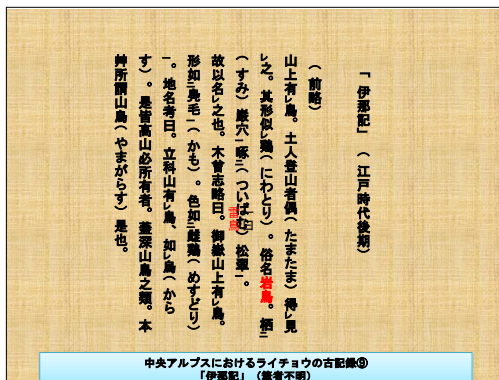
続きまして「雷鳥」と書くライチョウの資料を見てみたいと思います。



こちらですけれども、江戸時代後期、高遠藩儒臣である中村元恒・元起親子によって編さんされた高遠の地誌である「路原拾葉」に掲載されており、す「伊那古道記」という資料がございますが、そちらの一節です。

ここにはライチョウは「雷鳥」、雷の鳥として書かれていて、「鶴」という字は漢名であると、だから雷鳥というのだと、そんなことまで書いてあります。

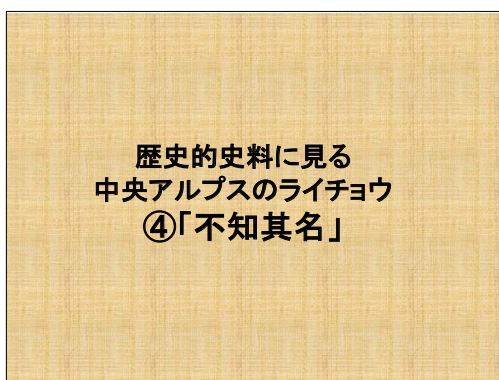
西暦1710年に「淵鑑類函」という中国の百科事典ができていて、そこには「松鴨」という鳥が書いてあって、恐らくそれに相当するだろうという、そんなようなことまで書いてあります。



こちらは江戸時代後期に記された「伊那記」という書物の一節になります。

ここには、ライチョウが鶏に似ているとか、松をついばむとか、それから御嶽山の上にもいて形はカモに似ているとか、そんなようなことも記されております。

最後に、「そのなをしらず不知其名」というものもあります。



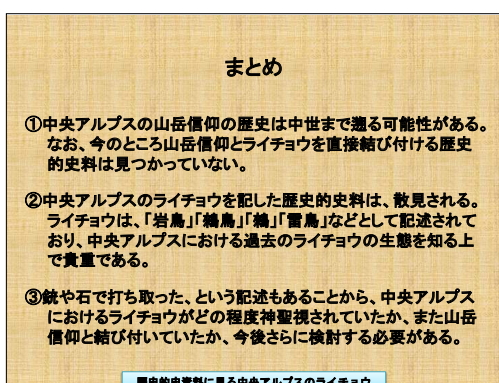
これは、地元では有名な高遠藩土坂本天山が天明4年—1784年に検分登山の記録として残した「登駒嶽記」の一節です。

ここには、鳥がいて、身はウズラのように、翼はワシのようだ、すねに毛が生えている、飛び回って、ハイマツ、一面に広がった松の中に降り立って1つ、1羽でいると、そして「不知其名」とここに書いてあります。

ですので、坂本天山一行は、これは天明4年ですから1784年、江戸中期の終わり頃に検分登山で山の上に登ったのですけれども、その頃は、まだライチョウの名前とか、どういった鳥であるとか、そういったライチョウの素性については知らなかったということがこの資料からは分かります。

まとめになります。

中央アルプスの山岳信仰の歴史というのは、先ほど御覧いただいたように中世まで遡る可能性がありますけれども、今のところ山岳信仰とライチョウを直接結びつける歴史的資料というのは見つかっておりません。





中央アルプスのライチョウを記した歴史的資料は先ほど御覧いただいたようなものが散見されます。

ライチョウは、こういった「岩鳥」ですとか、鵜の字を書く「鵜鳥」、「鵜」とか「雷鳥」などとして記述されておりまして、中央アルプスにおける過去のライチョウの生態を知る上でも非常に貴重なものと言えそうです。

銃で撃ち取った、石で討ち取ったという記述もあるので、中央アルプスでライチョウは神聖な鳥だと思いますけれども、当時の人がどの程度神聖視していたかというのは、まだ今後の調査課題かなと思います。

それから、山岳信仰とどのように結びついていたかというのは、今後さらに資料を調査することでまた明らかになってくる部分があるのかなというふうに考えております。

以上で私からの御報告を終わります。

ありがとうございました。(拍手)

○座長(有山 義昭) 小池様、ありがとうございました。

江戸時代の文献も含めてライチョウがどういうふうに表現されていたかということで、貴重に思いました。どうもありがとうございます。

質疑応答

○座長(有山 義昭) それでは、最後に質疑の時間を設けたいと思うのですが、もう12時12分です。12時10分までということで予定を組んでいましたけれども、本当に一方、もしこれだけという方がいらっしゃいましたらお一方から質問を受けて、7人の発表者の方はちょっと前に御登壇もいただきまして、それで今回の第1部ということで締めたいと思います。

〔発表者一同登壇〕

○座長(有山 義昭) どなたかこれだけは質問したいという方はいらっしゃいますか。

では、前の方。

○質問者7 駒ヶ根市の北村と申します。

富山雷鳥研究会の松田さんにお聞きしたいのですが、巣の多様性は非常に興味深く拝聴いたしました。テリトリーの多様性はひなを育てるという側面で優劣の差があるのでしょうか。もし御存じでしたらお聞かせください。

○座長(有山 義昭) 松田様、お願いいたします。

○松田 勉 もう一度、ひなを育てる何とおっしゃいましたでしょうか。申し訳ありません。

○質問者7 ひなを育てる環境としては優劣の差が出るのでしょうか。

○松田 勉 そうですね。室堂平を中心にやっていて、それで破卵数はどこが高いとか、襲われる率が高いとか、例えば70%ぐらい巣立ちが成功するような縄張と過去に30%ぐらいしか巣立ちをしない縄張があって、やっぱりそういう意味では優劣があると思います。

特に、岩場があってオコジョが住んでいるような縄張は結構食害を受けているようなデータを得ています。

○質問者7 特に標高で差があるというわけではなくて、そういった環境が……

○松田 勉 はい。オコジョとか、そういうのでは、標高的な差というよりも、その場所の環境によって違うと思います。

○質問者7 ありがとうございました。

○座長(有山 義昭) どうもありがとうございます。

ちょっと時間も押しましたので、これで第1部のほうを終わりたいと思います。

では、7名の発表者の方々はちょっと前に出ていただきまして最後を締めたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

〔発表者一同前へ進み出る〕

○座長(有山 義昭) 環境省といたしましても域内保全というのは重要なパートとしてこれからも中央アルプスのライチョウの野生復帰に向けて事業を継続していきますので、引き続きお願いしたいと思います。

それでは、いま一度、第1部の域内保全の現地での取り組みということで、最前線で活躍されている方々に対して大きな拍手をお願いしまして、終わりたいと思います。よろしく申し上げます。(拍手)

○司会者(本間香菜子) ありがとうございました。

私たちが日々のニュースではなかなか知ることができない様々な分野、形で尽力されている皆さんのお話を非常に興味深くお聞かせいただきました。

どうぞ、改めて盛大な拍手でお送りいただければと存じます。(拍手)ありがとうございます。

〔発表者一同降壇〕

○司会者(本間香菜子) 以上をもちまして第1部は終了となります。

これより休憩のお時間を取らせていただきまして、この後、第2部の再開は午後1時—13時を予定しております。お時間までにお席にお戻りくださいますようお願い申し上げます。

そして、このお昼のお時間は、エントランスの駒ヶ根市のブースでは御当地名物のソースかつ丼を販売しておりますので、よろし